

4 絵葉書収集の半生を ふりかえって

古書肆 紀国堂

溝端 佳則

私が絵葉書収集に手を染めることとなった原点は、16歳の時高校の図書館で見た歴史図書社版『紀伊名所図会』（以下「名所図会」という）4冊に出会ったことであった。元来、日本史には小学校以来非常に興味をもっていたが、教科書で習う歴史にはなにかしら物足りなさを感じていて、安藤精一氏の『和歌山県の歴史』を読んで郷土の歴史に関心を持っていた時期でもあった。図書館で本を借りることもなかった私であるが、こればかりは別であった。紀伊国の名所・旧跡、歴史、人物、風俗、特産物その他、多少の誇張はあるものの生き生きとした挿絵を交えての記述は、たちまち私を虜にしたのであった。なかでも驚いたのは、和歌山城下の町の様子が克明に描かれていることであり、見たこともない江戸時代の和歌山市内の風景に驚きの連続であった。とりわけ驚かされたのは当時庶民が入ることができない和歌山城の内部（鶴の溪）が描かれていることであった。（図1）図書館で名所図会を借りた私は、その頃宮井平安堂でコピーするには一枚50円だったので、たまたま手元に藁半紙が大量にあったのを幸いに名所図会の記述を好みにまかせて鉛筆で書写し、書き溜めたのを和綴じのようにミシン糸で綴じて悦に入っていたのが懐かしく思い出される。それは学校の勉強そっちのけの所業であった。

さて、大変興味深い挿絵を見るにつけ、まず



図1 鶴の溪

思ったことはそこが今どうなっているかであった。大きく変貌している場合もあるだろうし、わずかでも面影が確認できれば面白いだろうし、さらには絵図の世界により近い時代の写真があれば、江戸時代と現在をつなぐものとしてもっと面白いだろうとも考えたのであった。しかし、当時はそんな写真に出会うはずもなく、ましてや絵葉書という存在を知らない私は、それからしばらくは大学生時代を通じてこのような思いは封印せざるを得なかった。絵葉書にはじめて出会ったのは1983年の夏であった。和歌山市内の古書店「吉井書店」に江戸時代の刊本『紀伊国名所図会』が揃いでガラスケースに入っていて、全23冊で39万円の値がついていた。どうしても手に入れたい私は、社会人二年目の夏のボーナスだけではとても足りず、貯金をはたいて購入したのであったが、そのときに店の隅に1枚の絵葉書を発見し、ついでに購入したのであった。それは有田川の中流にあった「鮎瀧」の写真(図2)で、名所図会に描かれている絵図と似通った構図(図3)であったのと、そのくぐりを藁半紙に書写したことで鮮明に覚えていたからであった。ただ、今にして思えば、鮎瀧の古写真などはそうざらに出会うものでもなく、まして名所図会の挿絵と同じような構図だったのだから、こんな写真があるならもっと他にあるかも知れないと考えて他を探せば良かったのにと悔やまれてならない。もっと早く本格的に収集を始めるべきであったのであるが、当時の私の考えとしては写真絵葉書はあくまで印刷物であるという思いが強かったので、重きを置くことが出来なかったのである。それでも、古書店通いの中で地域の絵葉書を見つけた折はよく入手していたものである。しかし、その頃目にしたのは昭和戦前期の和歌の浦の不老橋・観海閣・東照宮・玉津島神社などの観光みやげのごくありふれたものばかりであった。これらの絵葉書を写真アルバムに三角コーナーでレイアウトして楽しむ程度にとど

まっていたのであった。

転機は古絵葉書をはじめて目にしてから7年ほど経過した1990年頃のことであった。ある人物の紹介で絵葉書を中心に古い時代の紙モノ資料を取り扱う業者の方を紹介して頂き、一気に大量の絵葉書を見る機会に恵まれたのであった。それまでは絵葉書と言えば名所・旧跡などを取り上げたありきたりの印刷物としか考えていなかったものが、大量の絵葉書を見るにつけ、明治末期から大正・昭和戦前期の絵葉書には和歌山県内の各地の街の風景や建造物、学校、交通、軍隊、神社仏閣、祭礼、産業、災害などがありとあらゆる種類の絵葉書が写真資料として残っており、しかも絵葉書でしか見られないものが圧倒的に多いため、これは是非にもまとめて残さなければならぬと思ったのであった。又、2002年頃と記憶するが、日本絵葉書会という絵葉書収集家の会に加入させて頂き、当初は二ヶ月に一回の開催であったが、程なく毎月の開催となり、ここ十年程は毎月欠かさずに参加しているが、その中には全国的にも名を知られたコレクターもいて、これらの方々から絵葉書の奥深い世界を知ることになり、ますます深みにはまっていたのであった。(日本絵葉書会からは関西絵葉書研究会という会も派生して今日に至っている。)絵葉書会に加入した当初は軍隊ものの絵葉書も収集の対象にされており、各地連隊の絵葉書も所有していたが、



図2 鮎瀧

和歌山ものの絵葉書を充実させるため、こちらの方は早くに断念して処分したことは賢明な判断であったと思う。以来、和歌山県内に加えて紀伊国であった三重県北牟婁・南牟婁郡と旧紀州藩領であった伊勢の松阪・田丸・白子及び大和吉野郡内の鷺家・越部・土田の三ヶ村の風景絵葉書を収集対象として現在に至っている。これらのうち、田丸と吉野郡の三ヶ村に関するものは未だに入手していない。

現在、手元には約一万五千枚の絵葉書があり、これらを概観すると各地の写真館や書店・雑貨店などが発行の担い手となっていたことが知られる。（図4は、和歌山県域内で発行部数が比較的多いものを取り上げたもので、発行元数としては全体のごく一部である。）地域に密着した発行元が、それぞれの地域の特色ある風景絵葉書を残すことになったのである。地元ならではの視点で被写体を選定し、これが現在の私たちにとって貴重な歴史資料となったのである。これらの発行元のうち、新宮町の久保写真館及び東雲堂、和歌山市の津田萬壽堂はそれぞれ「紀伊熊野百景」「熊野名勝」「紀伊百景」という大部のシリーズものを発行している。私は早くからこれらを収集の対象にしていた、どこまで集め切れるかを収集の進捗のひとつの指標としてきたが、まだまだ道半ばである。とりわけ、「紀伊百景」が一番早くに注目し、その全体像を解明したいと考えていた。というのも、私の地元の和歌山市の風景が多く、撮影にあたった写真師の技量がよく、加えて紙質が良く印刷のノリも良かったからであった。親勇之進という人物が撮影者であったことが判明したが、詳細は不明である。これらのシリーズものは、いずれも明治末年の発行であるが、印刷方法はコロタイプ印刷という細部の拡大確認に耐えるもので、例えば商店の小さな看板文字が確認できるなど、写真を再現する方法としてはすぐれた印刷法である。加えて印画紙プリントによる写真は経年劣化により、画像が薄くなってゆくが、

コロタイプ印刷により印刷インキに置き換えられた画像は劣化することなく、写真のように退色することがない。私が追い求めて来た風景絵葉書のほとんどは、コロタイプ印刷によるもので、歴史遺産ともいえる過去の風景がこのような手法で残されたことに改めて感謝せざるを得ない。

風景絵葉書を眺めていて、まず思い浮かぶのはその風景がいつの時代のものかということであろう。大雑把には絵葉書の表（切手を貼って宛名を書く側）の書式の様式や、紙質、印刷インキの色合い、消印の日付、キャプションの印刷方式、押印された記念スタンプの種類、写っている人物の服装や髪型、建造物の様式など、数え上げればきりが無い程であるが、小さな絵葉書からたくさんの情報を引き出して読み解いていくのが、なんといっても最大の楽しみである。又、和歌山での絵葉書の作成年代であるが、いつから作成されはじめたのかということも気になるところである。絵葉書一般でよく言われるのは、明治37～38年（1904～1905）の日露戦争時に逓信省が発行した戦役記念絵葉書が非常な人気を博し、これが爆発的な絵葉書ブーム巻き起こしたということである。そのブームは和歌山にもやって来たようで、明治38年4月14日付け『紀伊毎日新聞』に和歌山市本町1丁目津田書店（萬壽堂）の広告が掲載されており、「和歌山名所絵はがき・一



図3 鮎瀧

組十二枚・定価二十銭」となっていて、今私が確認できる和歌山での最古の絵葉書発行の広告記事である。和歌山県立図書館の司書を勤めた喜多村進は、和歌山で最初に絵葉書の発行をしたのは津田萬壽堂であると述べているが、これを裏付けるようで大変興味深い。さらに同年4月29日には「和歌山絵葉書交換会」の広告があり、5月6日の交換開始を告げている。遅れて7月26日には松本英文堂（和歌山市駿河町）の「絵葉書各種」の広告記事が見られる。和歌山でも全国的なブームを受けて風景絵葉書の製作・販売に乗り出した業者が出てきたことが伺える。因みに先の津田書店の広告には、和歌山城をはじめ12枚の絵葉書を写した地点を示す目次があり、その中に「三、和歌高松」というとても気になるものがある。というのも電車開通の4年前に作成された高松の名所絵葉書であれば、高松茶屋が被写体になっている可能性が高いからである。高松茶屋については、名所図会に描かれた茶屋の絵図や『和歌浦物語』での記述は知られているが、それ以外には記録したものは今のところ見当たらない。わずかに『和歌山と和歌浦』に電車開通によりその線路敷地となって廃業する直前の様子が記録されているが、収集家としては是非とも写真で確認したいものである。高松茶屋を写した絵葉書はどうもあるらしくて、そのキャプションには「投げ頭巾の松」となっていて茅葺屋根の建物の脇に人物が立っているというのである。このような話を聞くにつけ、思いは募るばかりである。

高松茶屋の絵葉書のようにその存在が判明しているにもかかわらず、未だ発見出来ずにいるものはかなりの数に上り、一方でそのようなものを探し出すうちにも全く未知の図柄の絵葉書に出会うことは再々で、そのような繰り返しで我が半生の30年が過ぎ去った。底知れない絵葉書の世界にどっぷりとつかって、その中から紀州ものの絵葉書を選んだとはいえ、やはり奥深い世界に変わりはない。収集事は個人の力の

みでは到底なしえないことであり、今後共皆様のお力をお借りしながら、残りの人生をかけて収集の充実に努め、後世の人からよくぞこれだけ集めて置いてくれたと言われるような形にしたいと心より念願している次第である。

図4

所在市町	発行元名
和歌山市	大正写真工芸（印刷）所 津田書店（萬壽堂） 松本英文堂 加太藤本写真部
橋本市	ツハダ写真館
御坊市	釜中日新軒
田辺市	池田写真館 山澤朝日堂
新宮市	久保写真館 東雲堂
紀の川市	光文堂 吉川写真館
岩出市	桂文館
湯浅町	松本写真館 小西写真軒
由良町	米與商店
みなべ町	橋本写真館
那智勝浦町	入海商店
串本町	丸す商店 浅利書店